

日本中東学会ニューズレター

**JAMES
NEWSLETTER**



No.113
1/31 2008

目 次

第 24 回年次大会参加申し込み等について	1
2007 年度第 4 回理事会報告	9
『日本中東学会年報』(AJAMES)編集委員会報告	11
第13回公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす(3)—— 日本のなかの中東、世界のなかの中東」報告	12
地域研究学会連絡協議会について	13
2007年北米中東学会年次大会に参加して	14
韓国中東学会に参加して	16
文献短評について	19
連絡先をご存じないですか	20
会員の異動	20
寄贈図書	22
会費納入のお願い	23
事務局より	23
編集後記	24

第 24 回年次大会参加申し込み等について

1. 参加及び懇親会申し込みについて

本号ニューズレターには、日本中東学会第 24 回年次大会への出欠通知、懇親会・弁当(昼食)の申し込みを兼ねた郵便振替用紙が同封されています。大会に参加さ

れる方は、この振替用紙をご利用の上、4月10日までに参加費をお払いください(研究発表希望の方の参加費納入期限は、後述のとおり、これより早く3月4日です)。また、懇親会費、2日目の弁当代などの納入も同封の振替用紙をご利用ください(託児所への寄付については、以下をご覧ください)。諸費用はできる限り前納をお願いします。

参加費は1,000円、懇親会費は5,000円(学生会員は4,000円)、2日目弁当代は1,000円です。なお、事前にお振込いただいた諸費用は返却に応じかねますので、その点もご注意ください。

2. 託児所の設置と寄付のお願いについて

すでにご案内申し上げたとおり、今回の年次大会では託児所を設置する予定です。これまでに数人の方からお申し込みをいただいております。ご検討の方もいらっしゃるものと思われませんが、どうかお気軽にご相談ください。

託児所の費用については、利用時間に応じて利用者の方に負担をお願いすることになりますが、利用者の負担を軽減し、今後も託児所の設置を継続して多くの方に利用していただくために、第22回年次大会と同様に、託児所設置のための寄付を受け付けることにしました。同封の振込用紙の通信欄に、参加費などと別に「託児所への寄付」という欄があります。寄付をご希望の方はその欄に記入していただき、参加費などと同時にお振り込みください。金額の多少は問いません。

なお、寄付としていただいた金額は、年次大会運営とは別会計に回し、託児所利用者の負担減の目的にのみ使わせていただきます。そして大会終了後、託児所に関する会計は独立して、会員の皆さまにご報告いたします。

3. 研究発表受付に関して

大会研究発表に関しましては、49名の個別発表と、2つの企画セッション(各3名の発表者)の受付をいたしました。積極的なご応募にお礼を申し上げます。

実行委員会では大会の暫定プログラムを以下のように作りました。ただし、これはあくまで仮のもので、今後発表予定者の都合などにより、若干の変更がなされる可能性があります。現時点で、ご参考までにお知らせします。

なお、最終的なプログラムと会場近郊のホテル案内、出張依頼状、総会議決の委任状などは3月下旬にお手元にお届けする予定です。



4. 日本中東学会第24回年次大会暫定プログラム

会場 千葉大学 西千葉キャンパス

2008年5月24日(土) 公開シンポジウム・総会

13:30～17:00 公開シンポジウム「パレスチナ問題と日本社会」

前半 基調報告： 広河隆一、板垣雄三

後半 リレー討論「私とパレスチナ」

17:30～18:20 日本中東学会総会

18:30～20:00 懇親会

2008年5月25日(日) 研究発表(Pはプロジェクター利用)

【午前の部】

第1部会

9:30～10:10 鷺見朗子(京都ノートルダム女子大学)・鷺見克典(名古屋工業大学)

「アラビア語学習・教育における興味と動機づけ——アラブ文化要素の意義」P

10:10～12:25 【企画セッション1】 企画者： 岡本久美子(大阪大学)

「日本におけるアラビア語教育法研究——Learners Oriented Teachingによる教習と学修」

岡本久美子

「アメリカの大学におけるアラビア語の授業について」P

柴谷温子(東海大学非常勤講師)

「日本語によるアラビア語入門書の文化面についての分析」P

宮川佳子(日本アラビア語検定協会)

「実用アラビア語検定試験とアラビア語のオンラインレッスンについての現状と今後の展望」P

第2部会

9:30～10:10 小島宏(早稲田大学)

「在日ムスリムにおける宗教実践の規定要因」P

10:10～10:50 山岸智子(明治大学)

「バハレーンのアーシェーラー」P

11:00～11:40 朝田郁(京都大学大学院)

「現代ザンジバルにおけるアラウィー教団の展開」P

11:40～12:20 藤井千晶(京都大学大学院)

「東アフリカ沿岸部における預言者医学の実践」P

第3部会

9:30～10:10 堀抜功二(京都大学大学院)

「アラブ首長国連邦における開発戦略と人口バランス問題——ザード時代(1971-2004)の検証」

10:10～10:50 石黒大岳(神戸大学大学院)

「クウェートにおける選挙制度改革と政治変動——政党公認化問題の考察」

11:00～11:40 黒田安昌(University of Hawaii at Manoa)

“Civil Society in Egypt and Lebanon: A Deep Structural Analysis of Attitudinal and Activity Patterns”

11:40～12:20 Housam Darwisheh(東京外国語大学大学院)

“The Political Role of the Muslim Brothers under Constrained Political Pluralism in Egypt since 1981”

第4部会

9:30～10:10 岡野内正(法政大学)

「『帝国』時代の中東からの平和構築の展望——新部族主義的な植民地化不正義審判導入の可能性」

10:10～10:50 鶴見太郎(東京大学大学院)

「シオニストはパレスチナに何を持ち込んだか——『シオニズムは植民地主義か否か』を超えて」 P

11:00～11:40 小林和香子(早稲田大学大学院)

「イスラエル・パレスチナ和平プロセスと国際法——『壁』に関する国際司法裁判所勧告的意見の例から」 P

11:40～12:20 錦田愛子(東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)

「レバノンのパレスチナ難民に関する法的地位の動向」 P

第5部会

9:30～10:10 大河原知樹(東北大学)

「フランス委任統治期シリアにおける結婚登録制度と結婚力研究——序説」 P

10:10～10:50 嶺崎寛子(お茶の水女子大学大学院)

「イスラーム言説の役割——女性説法師の活動を通じて」 P

11:00～11:40 後藤絵美(日本学術振興会)

「現代エジプトの女性とイスラームの知——ヒジャーブに関する言説と語りから」 P

11:40～12:20 鳥山純子(お茶の水女子大学大学院)

「『装い』の権力——現代カイロの女性未婚教師と『装い』」 P

第6部会

9:30～10:10 高岩伸任(一橋大学大学院)

「エジプトのワクフ改革——運営問題を中心に」 P

10:10～10:50 平野淳一(京都大学大学院)

「アフガーニー再考——生涯の再構築と思想的位置づけをめぐって」

11:00～11:40 高尾賢一郎(同志社大学大学院)

「現代スーフィズムに見るサラフィズムとの相克——『サラフィー・スーフィー』
理解から」 P

11:40～12:20 飯山陽(上智大学非常勤講師)

「近現代イスラーム思想におけるマスラハ」

第7部会

10:10～10:50 小笠原弘幸(日本学術振興会)

「オスマン朝におけるモンゴル観」

11:00～11:40 村山さえ子(お茶の水女子大学大学院)

「バグダードにおけるマドラサの発展と変遷——ニザーミーヤ学院からムスタ
ンスイリーヤ学院まで」

11:40～12:20 阿久津正幸(アジア・アフリカ語学院非常勤講師)

「ニザーミーヤ学院時代の学統——イスナード概念と知的伝統の連続と変化」 P

【午後の部 I】

第1部会

13:20～15:25 【企画セッション】 企画者： 浜中新吾(山形大学)

「中東政治体制研究における一般理論と事例研究の調和と相克」 P

浜中新吾

「政治体制の安定と変動に関する理論と事例研究の邂逅——イスラエル・エジ
プト・トルコ」

福富満久(中東調査会)

「選挙、民主化、民主主義の定着——中東・北アフリカにおける実態と独裁の均衡」

今井真士(慶應義塾大学大学院)

「体制動態過程の比較歴史社会科学アプローチ——時間、文脈、因果的メカニ
ズム」

第2部会

13:20～14:00 岡戸真幸(上智大学大学院)

「エジプトにおける同郷者団体の分析——アレクサンドリアのソハーグ県同郷
者団体を事例として」

14:00～14:40 加藤博・岩崎えり奈(一橋大学)

「あるエジプト・オアシス村の生成」P

14:40～15:20 関佳奈子(上智大学大学院)

「19 世紀末～20 世紀初頭のメリーリヤにおける異教徒の混住——1887 年と 1904 年の住民基本台帳を素材として」

第 3 部会

13:20～14:00 溝渕正季(上智大学大学院)

「レバノン・ヒズブッラーの誕生に関する政治社会学的分析——革命イデオロギーとその役割を中心に」

14:00～14:40 山尾大(京都大学大学院)

「イラク・イスラーム革命思想の共時性と独自性——1980 年代の亡命期イスラーム運動をめぐる考察」

14:40～15:20 黒田賢治(京都大学大学院)

「ポスト・ホメイニー期におけるハウザ制度と法学権威——コムにおける現地調査を中心に」

第 4 部会

13:20～14:00 細田和江(中央大学大学院)

「パレスチナ・アラブによるヘブライ語の文学——アントン・シャマスの『アラベスク』を中心に」

14:00～14:40 白神小鈴(京都大学大学院)

「イスラエルの NGO 『ゾフロット』 のユダヤ人スタッフのライフストーリーにみるシオニズムに対する批判的思想形成の契機」

14:40～15:20 飛奈裕美(京都大学大学院)

「エルサレムにおけるイスラエル占領政策とパレスチナ人の抵抗——住居建設の事例から」

第 5 部会

13:20～14:00 伊藤寛了(在トルコ日本大使館専門調査員・東京外国語大学大学院)

「トルコ共和国初期における宗教保守層の出現」

14:00～14:40 宇野陽子(津田塾大学国際関係研究所)

「トルコ大国民議会第一議会における野党と外交——ローザンヌ条約論争を中心に」P

14:40～15:20 山下王世(東京外国語大学)

「コジャテペ・モスクのデザイン変更について——アヤソフィア論争を中心に」P

第6部会

13:20～14:00 大工原桂(国際金融情報センター)

「オイルブームがもたらす中東産油国の社会変動」P

14:00～14:40 ブカーリ・イサム(在日サウジアラビア大使館附属アラブ・イスラーム学院・早稲田大学大学院)

“Brain Drain and Attracting Talents in Arab World: Present Issues and Future Prospective”P

14:40～15:20 和氣太司(日本学生支援機構)

「湾岸諸国における高等教育改革の進展」P

【午後の部Ⅱ】

第2部会

15:40～16:20 幸加木文(東京外国語大学大学院)

「現代トルコにおける『イスラーム派』の位相——フェトゥッラー・ギュレンの位置付け」

16:20～17:00 若松大樹(上智大学大学院)

「アレヴィー集団の『スンニー化』による社会変化——トルコ共和国キュタフヤ県の事例から」P

第3部会

15:40～16:20 丸山大介(京都大学大学院)

「スンナ派神学のワリー論」

16:20～17:00 茂木明石(上智大学大学院)

「イマーム・シャーフィイーのミフナ(審問)」

第4部会

15:40～16:20 北澤義之(京都産業大学)

「第15期ヨルダン下院選挙の特徴について」P

16:20～17:00 青山弘之(日本貿易振興会アジア経済研究所)・高岡豊(中東調査会)

「シリア・アラブ共和国での政治意識調査(2007年)——全国世論調査の結果と今後の展望」P

第5部会

15:40～16:20 佐々木紳(東京大学大学院)

「オスマン帝国と普仏戦争——情勢分析からパン・イスラーム主義へ」

16:20～17:00 長谷部圭彦(東京大学大学院)

「近代オスマン帝国における教育審議会——国家評議会教育局を例に」

第6部会

15:40～16:20 長岡慎介(京都大学大学院)

「現代イスラーム金融における集計の問題——ベンチマーク・インデックスと政策変数の構築とその適用について」P

16:20～17:00 上山一(一橋大学大学院)

「イスラーム銀行・金融研究の動向——イスラーム銀行のリスク分析を中心に」

5. 研究発表予定者の方へ

発表予定者の方は、3月4日までに、①発表要旨原稿(詳細は以下)の提出と②参加費の振込みをお願いいたします。期日までにこの2条件が満たされないときには、発表をお断りすることがありますのでご注意ください。また、プロジェクター利用について変更がありましたらお知らせください。

【発表要旨執筆要項】

1. 要旨は大会当日配布される要旨集に掲載します。
2. 分量は、和文 1,000 字、英文 350 words 以内とします。
3. 日本語の発表には必ず英文要旨もつけてください。
4. 和文、英文とも題名、名前、所属、要旨本文の順序で書いてください。ただし、所属の書き方等、書式は統一性を保つため、こちらで編集する場合があります。フォント、行数等についてもこちらで決定します。
5. 英文のブラッシュアップ、ネイティブ・チェックは大会実行委員会では行いません(簡単なスペルミス等の修正を除く)。各自の責任で行ってください。
6. アラビア語転写などで特殊文字は用いないでください。
7. 書式なし(=シンプル)テキスト・ファイルで、E-mail に添付して、大会事務局アドレス(james2008@L.chiba-u.ac.jp)に3月4日までにご送付ください。

第24回年次大会実行委員会事務局長 秋葉淳

〒263-8522 千葉市稲毛区弥生町 1-33

千葉大学文学部

TEL & FAX: 043-290-3630

Email: james2008@L.chiba-u.ac.jp

(秋葉淳)

2007 年度第 4 回理事会報告

日時： 2007 年 11 月 3 日 15:00～19:30

場所： 上智大学 2 号館 2-630a 会議室

出席： 私市正年会長、赤堀雅幸事務局長、飯塚正人、大塚和夫、加藤博、栗田禎子、酒井啓子、櫻井啓子、東長靖、林佳世子、山岸智子、山口昭彦の各理事

欠席： 大稔哲也、黒木英充、羽田正の各理事(委任済み)

【報告事項】

1. AJAMES 編集委員会報告(林) → 11～12 ページの記事もご覧ください。
 - ・AJAMES 23-1 号は完成、送付済みであり、23-2 号についても順調に作業中。
 - ・科研費の交付について、年度ごとの計画調書提出が不要になった。
2. 第 24 回年次大会準備状況報告(栗田)
省略 → 1～8 ページの記事をご覧ください。
3. 第 12 回公開講演会報告(栗田)
省略 → ニュースレター前号(112 号)5～6 ページをご覧ください。
4. 第 13 回公開講演会報告(加藤)
省略 → 12～13 ページの記事をご覧ください。
5. ニュースレター111 号、112 号発行報告(赤堀)
 - ・印刷所との連絡ミスで 111 号の版面が下にずれた。112 号からマージンを変更した。
6. 研究文献 DB 報告(飯塚)
 - ・予定より遅れたが、東洋文庫からの業務委託に関する契約を締結した。著作権が学会にあることを確認し、東洋文庫のデータ使用権について文書を作成の予定である。
 - ・来年度からは東洋文庫との共同事業として実施する。
7. 地域研究学会連絡協議会関連報告(大塚)
 - ・11 月 24 日に大塚、大稔両理事が総会に出席し、大塚が協議会次期事務局長に就任の予定。 → 13～14 ページの記事もあわせてご覧ください。
8. その他
 - ・予算執行は概ね予定通りだが、公開講演会開催費と AJAMES 23-2 号編集費が予定より膨らむ可能性がある。
 - ・ホームページの短評シリーズに掲載されている書籍の表紙画像に関し、著作権上の許諾を得るべく手続きを進めている。

【審議事項】

1. 除名対象者の取り扱いについて(赤堀)
 - ・学会細則にしたがい、除名手続きを進めることとした。
 - ・復会規定について、文書を作成することとした。
2. 休会者の取り扱いについて(赤堀)
 - ・休会身分に留まっている複数名の会員に対して 2007 年度末までに復会もしくは退会の判断を促すこととした。
3. 第 25 回年次大会について(私市)
 - ・複数の会員に連絡し、さらに交渉を進めることを承認した。
4. 第 14 回公開講演会について(加藤、桜井)
 - ・「イスラームから多文化共存を考える」と題した講演会とパネル・ディスカッションを神戸で 10 月に開催し、基調講演は森本公誠会員に依頼することとした。
 - ・平成 20 年度科学研究費補助金(研究成果公開促進費)「研究成果公开发表(B)」に申請することとした。
 - ・講師、参加理事等の謝金や交通費支払いについて、基準を定めることとした。
5. 年次大会研究発表への査読導入について(私市)
 - ・第 24 回年次大会については導入を見送ったが、継続検討事項として、他学会の例について事務局を中心に情報収集することとした。
6. 年次大会企画セッションおよび共同発表における会員資格について(私市)
 - ・第 25 回年次大会以降について、企画セッションの企画者は会員に限り、報告者も原則として会員とするが、コメンテータはこの限りでないこととした。
 - ・同じく共同発表については、ファースト・スピーカーは必ず会員であり、非会員の発表を必要とする際は、理由を大会実行委員会に前もって説明することとした。
7. 非会員の研究発表への参加について(私市)
 - ・第 24 回年次大会以降について、会員と同額の参加費・懇親会費の支払いにより、総会への出席を除いて会員と同等の参加を認めることとした。
8. その他
 - ・今後、新入会員については、会長と事務局長が入会申込書を確認し、ニューズレター各号発行直前に理事に承認の可否を諮ることとした。
 - ・会費前納制度を見直すべく検討を開始することとした。
 - ・ポスドクや退職者など常勤の職を持たない会員の会費について検討することとした。
 - ・年次大会で設置する託児所について、利用可能性がある会員の事前登録を行い、原則は受益者負担としつつも、ニューズレター等で寄付の呼びかけも行う

うこととした。

- ・AJAMES 編集費を安定させるためにも、各号の総ページ数を一定にするよう、掲載可の原稿であっても次号に送るなどの方策を検討することとした。
- ・年次大会担当理事をおくべく検討することとした。
- ・理事会の開催回数をふやす必要について検討することとした。
- ・日本中東学会奨励賞特別基金を設置することとした。 (赤堀雅幸)

『日本中東学会年報』(AJAMES) 編集委員会報告

日本中東学会年報(AJAMES)編集委員会より、ご報告いたします。

1. 23-2 号刊行のお知らせ

23-2 号が、1 月 28 日付けで発行されました。2 月中旬にはお手元に届くものと思います。目次は以下のとおりです。今号には、臼杵陽代表による特集 *Japan and the Middle East before World War II* が掲載されています。また、論文・研究ノートには、力作がそろいました。編集委員会あてに、ご意見、ご感想などお寄せいただければ幸いです。

<論文>

Özer ERGENÇ & Hülya TAŞ, “Assessments on Land Usufruct and Ownership in Anatolia during the Seventeenth and Eighteenth Centuries”

鶴戸聡「現代アルジェリア文学における「アフリカ」の思想——カテブ・ヤシンの詩的戦略」

山尾大「共和国期イラクにおける政治変動とサドルのイスラーム国家構想」

後藤絵美「アムル・ハーリドと『信仰のヒジャーブ』——現代エジプトにおけるヴェール言説とその変化について」

苅谷康太「セネガル・ムリッド教団の原点——アフマド・バンバのガボン流刑譚」

宮澤栄司「アナトリアのチェルケスに見る記憶の政治と記憶の実践——旧貴族層出身者と奴隷子孫の対抗的記憶」

<研究ノート>

山本薫「ハイファの作家、エミール・ハビービー——都市の記憶としての文学」

<Special Issue>

Japan and the Middle East before World War II

USUKI Akira, “An Aspect of Middle Eastern and Islamic Studies in Wartime Japan: A Case of Hajime Kobayashi (1904-1963)”

TANADA Hirofumi, "Islamic Studies in Wartime Japan: An Analysis of Historical Materials of the Greater Japan Muslim League"

MISAWA Nobuo, "Japanese Commercial Museum in Istanbul (1928-1937)"

Abdullah GÜNDOĞDU, "*Sırat-ı Müstakim* (later, *Sebilürreşad*) and the Origin of the Japanese Image in Turkish Intellectuals"

A. Merthan DÜNDAR, "Three U.S. Reports Concerning the Japanese Pan-Asianism and Pan-Islamism"

<書評 Book Review>

Selahattin Öztürk, Abdurrahman Muhammed Hacismailoğlu and Muhammed Hızarcı, eds., *Hakkı Tarık Us Kütüphanesi Kataloğu: Süreli Yayınlar*. İstanbul: İstanbul Büyükşehir Belediyesi Kültür ve Turizm Daire Başkanlığı Kültür Müdürlüğü. 2006. xxi+491pp. (SASAKI Shin)

2. 24-1号の投稿を締め切りました。

12月20日に、2008年度刊行となる24-1号の投稿を締め切りました。論文・研究ノート・書評に対し、合計で18本の投稿がありました。どうもありがとうございました。刊行は、2008年7月を予定しています。乞う、ご期待。

3. 24-2号への投稿をお待ちしています。

次々号24-2号への投稿締切は、2008年6月20日です。論文、研究ノート、書評、博士論文要旨など、各ジャンルへの投稿をお待ちしております。投稿予定の方は、学会ホームページより最新版の原稿執筆要領をダウンロードいただき、そのルールを遵守の上、ご執筆ください。

また、年報では、中東研究博士論文要旨(英文)の掲載を行っています。博士論文を執筆された方、研究活動の一端を紹介いただく意味からも、是非、英文要旨をご提供ください。指導された先生方にもご紹介の方、よろしく願います。投稿ならびに AJAMES についての諸種のご連絡には、次のアドレスを利用しています。 ajames-editor@tufs.ac.jp

どうぞよろしく願います。

(林佳世子)

第13回公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす(3)—— 日本のなかの中東、世界のなかの中東」報告

2007年10月27日(土)13:30~18:00、長野県長野市信州大学教育学部 E504 教室において、信州大学教育学部、長野県教育委員会、長野市教育委員会、ニーズ対応型地域研究推進事業プロジェクト「アジアのなかの中東」を後援として、「日常の

なかに中東を掘り起こす(3)——日本のなかの中東、世界のなかの中東」と題された日本中東学会第13回公開講演会が開催された。これは、2006年7月25日、東京で開催した第10回公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす(1)——教育現場の中での中東・イスラーム」、および2006年11月18日、山口で開催した第11回公開講演会「日常のなかに中東を掘り起こす(2)——地方における中東・イスラーム」を引き継ぐ講演会で、その目的は、日本と中東との間の文化交流の歴史を振り返るとともに、中東研究者、中高校教員、高校生、その他市民が集まり、身近な中東関係の情報と知識を発掘・検証しながら、日常生活や学校教育における中東・イスラームの姿について考えることにあった。

内容は、(1)「駱駝と日本人」(杉田英明東京大学教授)、「新しい世界史へ」(羽田正東京大学教授)と題された二つの講演と(2)パネル・ディスカッション「世界史教育における中東・イスラーム」から構成された。杉田氏の講演は、日本人の駱駝観の変遷を追う中で日本の社会風俗を論じるもので、スライドやビデオを駆使した大変に面白い講演であった。他方、羽田氏の講演は、多義的に使われる「イスラーム世界」の地域概念としての妥当性を批判し、それに代わる「人類」、「地球」を包括する世界史叙述の必要を訴える誠に啓発的な講演であった。

「パネル・ディスカッション」では、長年、世界史教育に携ってきた二谷貞夫上越教育大学名誉教授の「どこまでできたか中東・イスラーム認識——私の世界史学習遍歴」と題された基調講演を皮切りに、中高校の現場において世界史教育を担われているお三方、小川幸司(長野県松川高等学校教諭)、窪田善雄(長野県小諸高等学校教頭)、鈴木久男(千曲市立屋代中学校教頭)がパネリストとして、世界史教育に対する自説と問題点を披瀝された(司会は加藤博一橋大学教授)。

パネリストのお三方を中心に、大会の準備と宣伝に時間をかけたにもかかわらず、当日が雨であったこともあり、残念ながら、参加者は必ずしも多くはなかった。しかし、盛りだくさんのテーマと、啓発的な議論が熱く戦わされた。参加者は教育関係者が中心であったが、いくつかの出版社の編集者の顔も見られた。この経験を生かし、他の県においても、同様の企画を持ちたいものである。

(加藤博)

地域研究学会連絡協議会について —日本中東学会が事務局担当になりました—

地域研究学会連絡協議会の2007年度総会が、2007年11月24日に東京大学本郷キャンパスで開催されました。中東学会からは渉外担当理事として、大塚和夫と大稔哲也が出席しました。地域研究学会連絡協議会と申しましても多くの会員の方には耳慣れないかもしれませんので、少し説明をさせていただきます。

同協議会は2003年7月に発足しました。当時は日本学術会議の再編が論議されており、新学術会議の中で地域研究のプレゼンスを高めるため、地域研究に関連する学会の連絡・情報交換、および活動のプラットフォームとして形成されたものです。当初は15の学会によって発足しましたが、その後若干の出入りがあり、現在は19の学会(オブザーバーとして「日本学術会議地域研究委員会」と「地域研究コンソーシアム」)から構成されています。日本中東学会は、アメリカ学会、日本カナダ学会などとともに、同協議会の創設に尽力し、発足後も幹事学会としてその運営に貢献して来ました。

日本学術会議は2005年に再編成され、その過程で「地域研究委員会」が生まれました。同委員会のもとには、「地域研究基盤整備分科会」など6つの分科会(文化人類学や地理学も含む)が含まれております。このように、地域研究学会連絡協議会創設当初の目的のひとつは達成されたわけです。

とはいえ、いわゆるグローバル化のもと国際レベルでの政治・経済・社会・文化の動きは活発化し、歴史的展望の必要性も含め、学問としての地域研究の重要性はいっそう高まっております。そのような現状に鑑み、同協議会は、日本学術会議の協力学術研究団体として登録し、学術会議の地域研究委員会の活動を支援する体制を構築しております。さらに、地域研究に関わる諸学会が意見を交換する場、ならびに共同行動の基盤を提供しております。より詳細な情報は、協議会のHP、<http://www.jcas.jp/asjcasa/index-j.html> をご覧下さい。

さて、2007年度総会ですが、以下が報告事項と審議事項の概要です。

活動報告(ニューズレター創刊号の刊行、日本学術会議や地域研究コンソーシアムと共催したシンポジウム2件など)、会計報告、日本学術会議地域研究委員会の油井大三郎委員長からの報告。新規加入学会(オーストラリア学会、日本現代中国学会)の承認、入退会手続きなどの規約改正、今後の事業と予算、事務局・幹事学会の交代などです。

なお、事務局長は日本カナダ学会の加藤普章氏から中東学会の大塚に交代し、事務局は同じく大塚が担当となりました。さしあたりニューズレター第2号の編集を行っております。

地域研究学会連絡協議会の活動にご理解いただくとともに、何卒宜しくご協力のほどをお願いいたします。
(大塚和夫)

2007年北米中東学会年次大会に参加して

11月17日より4日間、カナダのモンリオールにおいて北米中東学会(通称MESA)の年次大会が開催された。今年は「NIHUプログラム イスラーム地域研究」の主催による“Roles of Intellectuals in Medieval Muslim Societies”と題するパネルセッ

ションが設けられ、私も発表者の1人として参加した。

我々のパネルは、17日の午後5時から時間帯に設定された。開催初日で会員の集まりもまばらな上、並行して18のパネルが組まれるマンモス大会のため、正直なところ集客が危惧されたが、蓋を開ければ20名ほどの聴衆を得、活発な議論が交わされた。私自身の発表に関しては冷や汗モノではあったが、事前ミーティングを重ねて諸先生方からの助言を頂いていたこともあり、なんとか足を引っ張らずにすんだかと思う。なおこのパネルの内容は、「イスラーム地域研究」が編集する英文論文集シリーズの1つとして刊行が予定されている。

ともあれ肩の荷を下ろした2日目以降、存分にMESAを堪能した。見学したパネルの中でもハイファ大のLevanoni教授によるマムルーク朝史関連のパネルを紹介したい。同教授以下3名による報告は、マムルーク朝期の「非」年代記史料を用いた研究である以外には共通点は少なく、パネル全体の整合性はきわめて低い。また報告者も「イスラエル人」と「アメリカ人」(人種ではなくアカデミックな所属による)からなる混成部隊であったが、実証を重視する前者(欧州の学風に通じるか)と、理論重視の後者との間には、学風において際立った対照があるように見受けられた。むろん聴衆の大半は「アメリカ人」であるため、質疑応答では理論的側面に議論が集中し、そのため「イスラエル人」発表者が置いてき堀を食らうようなシーンも見られた。北米の学会におけるメルティングポットの状況を垣間見ると同時に、国境を越えた共同研究の難しさを痛感させるパネルであった。

他に是非とも紹介したいのは、大会に付随して行われた「フィルムフェスティバル」である。私がたまたま観賞したのは、米国在住ムスリマの若手監督による“Me and the Mosque”と題する短編で、北米のモスクにおける男女の礼拝スペースの「仕切り」の是非を問うた、コミカルかつ示唆的な作品であった。こうしたドキュメンタリーのほか、最新のエジプト娯楽映画など40を超える作品が、会期中常時無料で上映されていることに大いに衝撃を受けた。日本の学界における中東メディア研究や映像人類学等の盛り上がり、あるいはより一般的な中東映画のブームを考えると、日本中東学会でもこうした場を設けてもよいのではないかと思うのだが、どうだろうか。

さて、今回乗換えに使ったデトロイト空港では、我々のようなトランジット客に対してまで指紋押捺や手荷物検査などの手続きが課されたが、帰途に就いた11月20日は(奇しくも私の誕生日に当たるのだが)、日本において新たな入国審査制度が導入され、来日する外国人に対してはアメリカ同様、指紋押捺が義務化された日であった。北米の学会の懐の深さを見た後だけに、こうした排外主義的な制度ばかりがアメリカ水準になるのはなんともいたたまれない。日本の中東研究者の端くれとして、果たすべき責務の大きさを感ぜずにはおれない今旅行であった。

(中町信孝)

韓国中東学会に参加して

2007年度の韓国中東学会に、酒井啓子会員（国際交流担当理事）とマイケル・ペン会員、吉村慎太郎会員の3名が招待され、研究発表を行いました。以下はペン会員による報告です。英文でよせられたので原文のまま掲載いたします。

1. Learning from an Unusual KAMES Conference

Three members of JAMES – myself, Keiko Sakai, and Shintaro Yoshimura – accepted invitations to attend the 16th Annual Conference of the Korean Association of Middle East Studies (KAMES) in early December 2007. As most of you know, there have been many interesting and productive exchanges between these two academic associations going back for more than five years. I have been fortunate enough to be involved in several of them over the years.

Usually such events are held on a university campus like Hankuk University of Foreign Studies or the like. This time, the venue was the Shilla Hotel, the most expensive and prestigious in Korea. Also, the KAMES annual meeting was to be held in conjunction with something called The 5th Forum for Korea-Middle East Cooperation.

The reception was held on the evening of December 6th. The Shilla Hotel is very impressive architecturally, looking like an old Korean palace in the colorful national style. Waiting in the foyer together with Sakai and Yoshimura, I started to notice that the name tags of many of the other guests began with the title “Ambassador.” There was the ambassador of the UAE, and over there the ambassador of Morocco. Coming through the metal detector was the Saudi ambassador whom I had once met at a different KAMES event a couple of years ago.

But I really knew things were different when, as I was entering the main hall, I was greeted at the door (as were all the other guests) by none other than South Korean Foreign Minister Min-Soon Song.

The reception involved about two hundred guests, and, truth be told, there were more diplomats, businessmen, and journalists than actual academics in attendance. Foreign Minister Min-Soon Song gave a nice welcoming speech in English, mentioning how he had just returned from a four-nation tour in the region, and emphasizing the importance he placed on Korea’s ties in the Islamic world.

The food was wonderful, but each of the three guests from Japan was seated at different tables, and the whole event seemed a little too formal for my tastes.

The next morning I and my two Japanese colleagues prepared for the main events. The first event was a long series of diplomatic speeches. Except for the English-language

video message from Arab League Secretary-General Amr Moussa (who was scheduled to have attended in person but couldn't make it) all of the other speeches were either in Korean language with Arabic interpretation, or in Arabic with Korean interpretation. Among the three of us from Japan, only Keiko Sakai is fluent in Arabic. The event was not terribly useful academically.

Since the second event was also a collection of diplomatic speeches, we reached a consensus to go to "The Library," which is the name of the cafe-bar at the Shilla Hotel, and we fortified ourselves with some double espresso shots. Actually, it was then that we were able to have a productive discussion together about the Shingetsu Institute, the Cafe Middle East project, and JAMES matters (including the writing of this report!).

The third section of the day was the academic section at last. The paper presentations were to take place in two rooms. I was scheduled to be the first academic presenter in the Topaz Room, and Sakai was simultaneously to give her presentation in the Ruby Room. The problem was that there was apparently still some kind of event taking place in the main hall, so the diplomatic types hadn't yet come over to our area. Also, the regular Korean Middle East Studies academics seemed to be largely absent from the Shilla altogether. What had happened to our Korean counterparts?

The clock on the wall indicated that it was time for my presentation. It was the most beautiful academic presentation room that I'd ever seen, but for my audience I had about six Korean graduate students who couldn't really understand English very well. I was fortunate, however, to have an engaging Iranian professor on the same panel who offered me some pertinent questions.

The last few hours of the KAMES conference were much better. By the time that our colleague Shintaro Yoshimura gave his presentation about an hour or so later, the main group had arrived, and there was a lively Q&A session. Also, the final dinner was more informal and we were able to have genuinely interesting conversations with other guests. I had a brief but interesting talk with a sharp-witted political science professor from Saudi Arabia, and I discovered that the friendly young Korean sitting next to me was a nephew of UN Secretary-General Ki-Moon Ban.

2. Comparing Middle East Studies in Japan and Korea

I'd like to complete this report by making a few observations that I think some people will welcome, and others will not.

At present, the character of KAMES and that of JAMES seem nearly polar opposites. Under its current leadership, KAMES has quite clearly become entwined with the Korean foreign policy establishment. It was pretty clear that this was more of a

diplomatic and elite business conference than an academic gathering. In contrast, JAMES is notable for its distance from actual Japanese foreign policies. Only a handful of diplomats are ever seen at a JAMES event, and at any rate most Middle East Studies academics in Japan concern themselves with pre-modern Islamic history of little interest to the policy types. From my observations, the Japanese government doesn't really want to hear from the specialists, and the specialists themselves want to keep their distance from the government.

Reflecting on my experience in Seoul, I wonder if KAMES might not have drifted too far in one direction, and JAMES lodged too far in the other.

I have a suspicion that there is a lot of bitter dissent within KAMES at the moment. While the leadership of the organization has been using it to gain credibility in the diplomatic and policy world, many others may be resentful about this. Why were so few of our Korean academic colleagues in evidence at the conference? My inference is that they deliberately kept away in silent protest to the direction that KAMES has taken.

JAMES' problem, in my view, is the opposite: It is simply too far from the "real world" of policy. I'm a historian, and I certainly highly value history. But in times like these, it seems to me that any self-respecting "Middle East Studies" organization must also be engaged proactively with the momentous issues of the contemporary age. Neither of the two organizations seems to have struck the right balance.

I do not recommend the current KAMES model for Japan. We are an independent academic organization and must remain so. We do not want the Japanese Foreign Ministry to take over our events. At the same time, there need to be more serious efforts to draw young Japanese graduate students into the fields of modern history and current affairs. Our own annual conferences need to show more engagement with the world we actually live in today.

I'm not calling for an abandonment of JAMES strengths in the studies of pre-modern history. What I am saying is that there is an imbalance that still needs to be addressed by the organization. There needs to be more effort to have practitioners from the fields of politics, diplomacy, business, and NGOs involved in our annual conferences.

Most of all, we need a larger proportion of our own academic presentations to deal with current and even highly controversial topics like terrorism, the Iraq War, the Arab-Israeli conflict, the MSDF mission in the Indian Ocean, and other similar topics that we read about in the newspapers every day. The Japanese public needs its most knowledgeable members to provide their expertise and take the risk of being a little more outspoken. In my view, this is one of our public, democratic responsibilities that comes with our relatively comfortable and safe positions in our various universities. It's not all

about committee work within our faculties.

At any rate, my trip to the Seoul conference of KAMES was very instructive – not always in the way that the organizers intended. I do highly recommend those members of JAMES who have not yet made exchanges with our colleagues in Korea to do so. They are friendly and hospitable and they want to have interactions with Japan. We can also learn much from what we have in common with them... as well as what we do differently.

(Michael Penn)

文献短評について —皆様からの投稿をお待ちしています—

「文献短評」は中東やイスラームに関係する新刊書を紹介するウェブ上の場で、日本中東学会の会員有志(通称「短評の会」)によって運営されています。ここではこのコーナーのこれまでの歩みと、活動の実態についてご報告します。

「文献短評」の第一歩が記されたのは1999年のことです。1997年から5年に渡って実施された、いわゆる旧「イスラーム地域研究」の研究班5(東洋文化研究所)の活動の一環としてはじめられました。呼びかけを行なった、5班代表者の羽田正氏によれば、学生や若手研究者が新刊書について読後感や感想を気軽に発信できる場、論文ほど敷居が高くなく、意見や考えを自由に発言できる場を目標としていました。また、後に羽田氏から運営を引き継いだ森本一夫氏は、このコーナーを「研究の様々な成果を一般の方々に楽しく分かりやすく紹介し、専門家のサークルをこえた研究の社会還元をはかるため」のものだったと述べています。

2002年3月、旧「イスラーム地域研究」のウェブページの更新が終了するとともに、文献短評も活動を終えるはずでした。しかし存続を望む声も多く、当時の中東学会事務局の計らいで、中東学会のウェブページ上に掲載が認められることになり、現在に至っています。

「文献短評」は批評や評価を「肩肘張って」行なうというよりも、「自分はこう読んだ」「この本を読んでこう感じた」といった率直な感想や読後感を発信し、互いに刺激を与えることを目指しています。自分が読んだ最新の研究を、歴史や地域、研究分野の異なる研究者仲間にわかりやすく紹介したい。普段の研究を離れ、他分野の著作を読んだときの新鮮な読後感を伝えたい。はたまた、今年のカイロのブックフェアはこんなだった。——こうした思いを感じたら、是非ご投稿ください。原稿は「短く、わかりやすく」。中東・イスラームに関わる著作であれば幅広く受け付けています。形式については、ウェブ上の投稿規程や過去の記事をご覧ください。また、不明な点があれば担当者(bunkentanpyo@hotmail.co.jp)まで気軽にご相談ください。

「文献短評」は皆さまのご協力によって成り立っています。正直なところ、最近
は投稿が少なく、存続が危ぶまれています。今回の報告を読んで「これなら私も」
と手を挙げる人が増え、一挙に投稿が押し寄せますように！どうぞ今後とも、ご
支援、ご投稿を宜しく願います。(後藤絵美)

連絡先をご存じないですか

下記の会員の方々は、連絡先が不明なため学会からのお知らせなどをお届けす
ることができないでおります。これらの会員の連絡先をご存じの方は、学会事務
局までご連絡いただけますよう、ご面倒でもご本人にお伝えいただけますでし
ょうか。

伊藤 祥子	江崎 智絵	奥田 瑞子	柏原 弘明	片山 能輔
唐鎌 圭彦	河原井 正之	岸 真由美	木下 宗篤	黒田 努
笹嶋 建	渋谷 努	杉田 聖子	高橋 知寛	田村 真奈
土屋 和良	中川 喜与志	中村 明日香	南里 浩子	西田 今日子
畑中 美樹	細谷 幸子	南川 亜樹子	森広 泰平	安永 真理
吉村 武典	吉本 哲子	依田 純和	和崎 聖日	渡辺 正志
Ahmed Mohammed Kandil	Ahmed Naili		Ali Abdullah Alkahtani	
Aliasghar Saharkhiz	El-Gazar Hegazi		El-Mostafa Rezrazi	
Jahangiri Nader	Keivan Abdoly		Khan Muhammad Azhar	
Mo Chun Chan	Modjtaba Sadria		Raja A. Adal	
Rochmat Saefur	Samy Mohamad Soliman Ahmad			
Seong Min Hong				

会員の異動

【新入会員】

【所属先・連絡先の訂正・変更】

寄贈図書

【単行本】

水谷周『穏健派ムスリムの知的闘争——アフマド・アミン(1889-1954)』エジプト文化省、2007年。

吉村慎太郎『レザー・シャー独裁と国際関係——転換期イランの政治史的研究』広島大学出版会、2007年。

【逐次刊行物】

『季刊アラブ』123号、日本アラブ協会、2007年。

『Newsletter』1号、グローバル COE プログラム「生存基盤持続型の発展を目指す地域研究拠点」、2007年。

会費納入のお願い

本会は会費前納制をとっております。2008 年度およびそれ以前の会費に未納がある方は、本号のニューズレターに郵便振替払込用紙が同封されておりますのでご利用ください。AJAMES に未送付分がある場合は、2007 年度以前の未納分会費の払込確認後お送りいたします。なお、請求会費額は 2008 年 1 月末日の振込確認に基づいておりますので、その後に納入され、請求に行き違いが生じた場合にはご寛恕ください。

事務局より

2008 年最初のニューズレターをお届けします。AFMA 大会の東京での開催、WOCMES 2 への派遣など国際交流関係の大きな催しが続いた 2006 年度に比べると、平穏な 2007 年度ではありますが、拡大した規模にあわせて学会が改めるべきことからはそれこそ山積しており、事務局は変わらず疾走を続けています。会員の皆様のますますのご協力をお願い申し上げます。(赤堀雅幸)

- ・ 会費納入率（1 月末時点）が、2007 年度分 78%、2008 年度分 59%にとどまっています。これは学会運営に支障を来しかねない値です。この厳しい状況にご理解あって、会費を納めていただけますよう皆様をお願い申し上げます。
- ・ 今号には連絡先不明の会員氏名の一覧を掲載しました。理事会および事務局では、これらの会員に学会としてのサービスが提供されないことを憂慮しており、さらには、会費未納について注意を喚起できないままに除名にいたる事態を招くことを極力避けたいと考えております。会員のご協力をお願い申し上げます。
- ・ 2006 年度の会則改正、2007 年度の細則改正を受けて、休会の制度が廃止されました。理事会の議を経て、現時点で休会の身分にある会員は 2008 年 4 月 1 日をもって復会するものといたします。よろしくご了解ください。
- ・ すでにご存じの会員もおられるかと思いますが、2007 年 12 月 24 日閣議決定の「独立行政法人整理合理化計画」に、日本学術振興会カイロ研究連絡センターの「廃止等見直しを検討する」との一文が盛り込まれました（詳細は、行政改革推進本部事務局のウェブサイトでご覧になれます。<http://www.gyokaku.go.jp/>）。学会は、本件に積極的に対応していく予定ですので、よろしくご了解ください。
- ・ 国立情報学研究所論文情報ナビゲータ (CiNii) での AJAMES の利用が急速に伸びております。従来の個人 ID に加え、定額制機関に所属する方はサイトライセンス個人 ID を登録することで、自宅や出先からの利用がより便利になりました。ぜひご活用ください。

編集後記

2006 年末にはサッダーム・フセインの刑死、2007 年末にはベナズィール・ブットの暗殺、そして年が明けてスハルト死去のニュースがもたらされました。1980 年代、日本中東学会が設立された頃はバリバリの現役だったムスリム政治家たちの「去りかた」にはいろいろな感慨をおぼえます。ひるがえって学会を見れば、すべき仕事が学問的にも社会的にも、そして事務的にも山積しています。ニューズレターの記事を整理していると、学会設立当初の「同好会」的なやり方ではもう学



会運営が難しいのだと実感します。でも、「お願いがあるのですが」といって問題を解決していた頃の和気藹々とした雰囲気を失うのもちょっと寂しい。ニューズレターが少しでも会員同士の暖かい雰囲気作りに貢献できればと思います。本年もニューズレターをどうぞご愛顧ください。
(山岸智子)

日本中東学会ニューズレター 第113号

発行日 2008年2月8日
発行所 日本中東学会事務局
印刷所 東洋出版印刷株式会社

日本中東学会事務局

〒102-8554 東京都千代田区紀尾井町7-1
上智大学アジア文化研究所気付
Tel & Fax: 03-3238-3693
Eメール: james@db3.so-net.ne.jp
<http://wwwsoc.nii.ac.jp/james/>
郵便振替口座: 00140-0-161096(日本中東学会)
銀行口座: 三井住友銀行渋谷支店(普)5346808
(日本中東学会 代表 私市 正年)